

口腔咽喉薬(せき、たんを標榜しないトローチ剤を含む)、口内炎用薬

製品群No. 73,74

ワークシートNo.45

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化						
評価の視点	薬理作用	相互作用 併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	重篤な副作用のおそれ 薬理・毒性に 基づくもの	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ 特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌 慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ) 使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果
殺菌消毒成分	塩化セテル ピリジニウム	スプレー トローチ	口中で頻りに 遭遇する病原 細菌である溶 血性連鎖球菌 や黄色ブドウ 球菌またカン ジダ等の真菌 に対して、強 力な殺菌作用 を現す。		0.1%未満(口 腔、咽喉の刺 激感等)	5%以上又は 頻度不明(過 敏症)					口腔内で唾液に より徐々に溶か しながら用いる (噛み砕いたり、 飲み嚥んだりし ない)(トローチと しての注意)			1回1錠を1日3~4回かま ずに口中で徐々に溶解し て使用する。	咽喉炎、扁桃 炎、口内炎
	塩酸クロルヘ キシジン	塩酸クロル ヘキシジン トローチ・ヒ ビテン	抗菌剤の中 でも広範囲の 微生物に作用 する部類に 属し、特にブ ドウ球菌など のグラム陽性 球菌には、低 濃度でも迅速 な殺菌作用を示 す。一方、大 腸菌などのグ ラム陰性菌に も比較的低濃 度で作用する ことが知られ ているが、グ ラム陽性菌に くらべて感受性 に幅がみられ る。真菌類の多 くにも感受性を しめすが、全 般的に細菌類 よりも抵抗性 がみられる。		0.1~5%未満 (舌のしび れ、味覚異 常、口内炎、 黒舌症、胃部 不快感、胃部 膨満感、嘔 吐、下痢等)	頻度不明 (過敏症)	クロルヘキシジン に対して過敏症の 既往歴				口腔内で唾液に より徐々に溶か しながら用いる (噛み砕いたり、 飲み嚥んだりし ない)(トローチと しての注意)			通常、1回1錠(塩酸クロル ヘキシジンとして5mg)を1 日3~5回、2時間ごとに投 与し、口中で徐々に溶解さ せる。	口内炎、抗菌 剤を含む口腔 創傷の感染予 防
	ポピドンヨ ード	イソジンガ ーグル	殺菌菌に対 する効果、 コウモリウィ ルス(コウモ リウィルス)、 エコーウィ ルス、エン テロウイルス)効果を有 する。またヒ ト免疫不全 ウイルス(HIV) に対しては、 イソジンガ ーグルの30 倍希釈液で 30秒以内に 不活化した。 その他ポリ オウイルスに 対しても効果 が認められた。		ショック、アナ フィラキシー 様症状(0.1% 未満)	0.1~5%未 満(口腔、咽 頭の刺激感、 悪心)、0.1% 未満(口腔粘 膜びらん、口 中のあれ、不 快感)	過敏症(0.1% 未満)	本剤又はヨウ素に 対し過敏症の既往 歴	甲状腺機能に異常		拔牙後の口腔 創傷時(血餅の 形成が阻害され ると考えられる 時期)にはげい洗 口は避ける。眼 に入らないよう にする。用時希 釈して使用。含 そうのみ使用			用時15~30倍(本剤2~4 mLを約60mLの水)に希釈 し、1日数回含嗽する。	咽喉炎、扁桃 炎、口内炎、 拔牙創を含む 口腔創傷の感 染予防、口腔 内の消毒

口腔咽喉薬(せき、たんを標榜しないトローチ剤を含む)、口内炎用薬

製品群No. 73,74

ワークシートNo.45

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果	
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化
評価の視点	薬理作用	相互作用 (併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)		併用注意		薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ			
ヨウ化カリウ ム	内服のみ																
ヨウ素	グロブダイン ソリューション	・使用濃度 において、栄養 型細菌(グラム 陽性菌、グラム 陰性菌)、結核菌、 真菌、一部の ウイルスに有効 である。 ・細菌、真菌 に対する殺菌 効果、結核菌 に対する効果 が認められる。				アナフィラキ シー様症状 (0.1%未 満)	0.1%未満 (そう痒感、灼 熱感、皮膚潰 瘍、皮膚変 色、接触皮膚 炎、血中甲 状腺ホルモン 値(T3、T4 値等)の上昇 あるいは低 下などの甲 状腺機能異 常)	(0.1%未満) 過敏症		妊婦中及び授乳 中の婦人への長 期にわたる広範囲 の投与	本剤またはヨウ素 に対し過敏症の既 往歴、甲状腺機能 に異常、重症の熱 傷、新生児、臍内 投与、妊婦の臍内 長期投与(新生児 に過性の甲状腺 機能低下)		眼に入らないよう 注意。外用にの み使用する	妊婦中及び 授乳中の婦 人への長期 にわたる広 範囲の投与 で先天性甲 状腺機能低 下症の乳児、 溶液の大量 かつ長時間 の接触によ って皮膚変 色、接触皮膚 炎		1.本剤を塗布する。 2.本剤を患部に塗布する。	1.手術部位(術野)の皮膚の消毒、手術部位(手術野)の粘膜炎の消滅、2.皮膚・粘膜創傷部位の消毒、熱傷皮膚面の消毒
アクリノール 液	アクリノール 液	グラム陽 性、陰性菌に 有効で、特に 連鎖球菌、 ウェルシュ 菌、ブドウ球 菌、淋菌に対 し、静菌及び 殺菌作用が ある。作用機 序は、生体で アクリジニウ ムイオンとな り細胞の呼吸 酵素を阻害す るといわれて いる。				頻度不明(塗 布部の疼痛、 発赤、腫脹等 潰瘍、壊死)	頻度不明(過 敏症)						・大量服用時 には、悪心、嘔 吐、肝機能障 害・外用に のみ使用し、 内服しないこと		0.05~0.2w/v%の液として 使用する。	化膿局所の消毒、泌尿器・婦人科手術前後、化膿性疾患(せつ、よう)扁桃炎、副鼻腔炎、中耳炎	
抗炎症成分	アズレンスル ホン酸ナトリ ウム	含嗽:アズ ノール錠	消炎作用及 び創傷治癒 促進作用、ヒ スタミン遊離 抑制・白血球 遊走阻止作 用を有する			0.1%未満(口 中のあれ)、 頻度不明(口 腔、咽頭の刺 激感)							接種後等の口腔 創傷時(血餅の 形成が阻害され ると考えられる 時期)には、洗い 口は避ける。		アズレンスルホン酸ナトリ ウムとして、1回4~6mg≪ アズノール錠:2~3錠≫ を、適量(約100mL)の水又 は微温湯に溶解し、1日数 回含嗽する	咽頭炎、扁桃 炎、口内炎、 慢性歯肉炎、舌 炎、口腔創傷	
塩化リゾチー ム	レフトーゼ錠	抗炎症作用: 膿瘍形成・組 織修復作用: 膿液の分解 と排出作用: 出血抑制作 用				ショック、アナ フィラキシー 様症状・SJ症 候群・Lyell 症候群(頻度 不明)	0.1~5%未 満(下痢、胃 腸不快感、悪 心・嘔吐、食 欲不振)、 0.1%未満(口 内炎等)、頻 度不明(肝機 能障害 (AST(GOT)、 ALT(GPT)、 Al-P、γ- GTP、LDHの 上昇等、めま い)	0.1%未満(過 敏症)	本剤の成分過敏 症の既往歴、卵白 アレルギー(アナ フィラキシー・シ ョックを含む過 敏症状)	アトピー性皮膚炎、 気管支喘息、薬剤 アレルギー、食物ア レルギー等のア レルギー性素因、痲 瘋、兄弟等がア レルギー症状の既往 歴、高齢者			作用機序は 解明されて いない点多 く、用量・効 果の関係も 必ずしも明 らなされて いないので、 漫然と投与 しない。	1.慢性副鼻腔炎の腫脹の 融解、痰の切れが悪く、喀 出回数が多い気管支炎、 気管支喘息、気管支拡張 症の喀痰喀出困難、小 手術時の術中術後出血 の場合、通常、成人は1 日塩化リゾチームとして、 60~270mg(力価)を3回に分 けて経口投与する。2.歯 槽膿腫(炎症型)腫脹の 融解の場合、通常、成人 は1日塩化リゾチームと して、180~270mg(力 価)を3回に分けて経口 投与する。高齢者減量	1.慢性副鼻腔炎の腫脹の 融解、痰の切れが悪 く、喀出回数が多い 気管支炎、気管支 喘息、気管支拡張 症の喀痰喀出困難、 小手術時の術中術 後出血(歯槽膿腫(炎 症型)腫脹)の場合 2.歯槽膿腫(炎症型) 腫脹の融解の場合		

口腔咽喉薬(せき, たんを標榜しないトローチ剤を含む)、口内炎用薬

製品群No. 73,74

ワークシートNo.45

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果							
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の 症状の判別に注意を要する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化						
評価の視点	薬理作用	相互作用	併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の 症状の判別に注意を要する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ	スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
	グリチルリチン酸二カリウム	消炎作用 (1)抗アレルギー作用 (2)アラキドン酸代謝系酵素の阻害作用		甘草を含有する製剤、ループ利尿剤・チアジド系およびその類似降圧利尿剤	偽アルドステロン症(頻度不明)、横紋筋融解症(グリチルリチン酸または甘草を含有する製剤)					アルドステロン症、ミオパシー、低カリウム血症(低カリウム血症、高血圧症等を悪化)	高齢者、妊婦等、小児					長期運用により偽アルドステロン症		グリチルリチンとして、通常成人1日1回40mgを皮下注射する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	薬疹	
	グリチルリチン酸	消炎作用 グルチルリチン酸モノアンモニウム・グリチロン注一号を使用		ループ利尿剤・チアジド系およびその類似降圧利尿剤(低カリウム血症)、甘草(偽アルドステロン症)	偽アルドステロン症(頻度不明)、横紋筋融解症(グリチルリチン酸または甘草を含有する製剤)					偽アルドステロン症、ミオパシー、低カリウム血症(低カリウム血症、高血圧症等を悪化)	高齢者、妊婦小児等					長期運用により偽アルドステロン症		グリチルリチンとして、通常成人1日1回40mgを皮下注射する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	薬疹	
抗炎症成分	トラネキサム酸	抗プラスミン作用(抗線溶作用) ・止血作用(フィブリン分解を阻害することによって止血) ・抗アレルギー・抗炎症作用	トロンピン(血栓形成傾向)	ヘモコアグラゼ(大量併用により血栓形成傾向)、バトロキシゾン(血栓・塞栓症)、凝固因子製剤(口腔等、線溶系活性が強い部位では凝固系がより亢進)			0.1~1%未満(食欲不振、悪心、嘔吐、下痢、胸やけ)、0.1%未満(眼炎)	0.1%未満(過敏症)		トロンピンを投与中	血栓、消血栓凝固障害、術後の臥床状態および圧迫止血の処置、腎不全、本剤に対し過敏症の既往歴、高齢者							トラネキサム酸として、通常成人1日750~2,000mgを3~4回に分けて経口投与する。高齢者で減量。	○全身性線溶亢進が関与すると考えられる出血傾向 (白血球、再生不良性貧血、紫斑病等、および手術中・術後の異常出血) ○局所線溶亢進が関与すると考えられる異常出血 (肺出血、鼻出血、性器出血、腎出血、前立腺手術中・術後の異常出血) ○下記疾患における紅斑・腫脹・そう痒等の症状 ・湿疹およびその類症、蕁麻疹、薬疹・中毒疹 ○下記疾患における咽頭痛・発赤・充血・腫脹等の症状 扁桃炎、咽喉頭炎 ○口内炎における口内痛および口内粘膜アフター	
	アラントイン	なし																		

歯痛・歯槽膿漏薬

製品群No. 75

ワークシートNo.46

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化					
評価の視点	薬理作用	相互作用 併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
		併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの				使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
歯痛・歯槽膿漏薬														
投 菌 成 分	イソプロピルメチルフェノール	フェノールを使用	本剤は、使用濃度においてグラム陰性菌、グラム陰性菌、結核菌には有効であるが、芽胞(炭疽菌、破傷風菌等)及び大部分のウイルスに対する効果は期待できない。			頻度不明(過敏症)	・横痂皮膚及び結膜(吸収されれ中毒症状発現)				・原液または濃厚液が皮膚に付着した場合には、(吸収され、中毒症状を起こすことがある。眼に入らないように注意すること。 ・本剤は必ず希釈し、濃度に注意して使用すること。 ・炎症または易刺激性の部位に使用する場合には、濃度に注意して正常の部位に使用するよりも低濃度とすることが望ましい。 ・外用にのみ使用すること。 ・密封包帯、ギブス包帯、バグに使用すると刺激症状及び吸収され、中毒症状があらわれるおそれがあること、使用しないこと。 ・長期間または広範囲に使用しないこと。[吸収され、中毒症状を起こすおそれがある。] ・傾飲を避けるため、保管及び取扱いには十分注意すること。	・長期間に使用しないこと。(吸収され、中毒症状の発現のおそれ。)	効能・効果 用法・用量(本品希釈倍数) ・手指・皮膚の消毒:フェノールとして1.5~2%溶液を用いる。(50~67倍) ・医療用具、手術室・病室・家具・器具・物品などの消毒:フェノールとして2~5%溶液を用いる。(20~50倍) 排泄物の消毒:フェノールとして3~5%溶液を用いる。(20~33倍) 下記疾患の鎮痒 痒疹(小児ストロフルスを含む)、じん麻疹、虫さされ液: フェノールとして1~2%溶液を用いる。(50~100倍) 軟膏:フェノールとして2~5%軟膏を用いる。(20~50倍)	
塩化セチルピリジ	スプロールトローチ	口中で頻繁に遭遇する病原細菌である溶血性連鎖球菌や黄色ブドウ球菌またカンジダ等の真菌に対して、強力な殺菌作用を現す。		0.1%未満(口腔、咽頭の刺激感等)	5%以上又は頻度不明(過敏症)							1回1錠を1日3~4回かまわずに口中で徐々に溶解して使用する。	咽頭炎、扁桃炎、口内炎	

歯痛・歯槽膿漏薬

製品群No. 75

ワークシートNo.46

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化等に伴う使用環境の変化				
評価の視点	薬理作用	併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの					使用量に上限があるもの	適量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
グルコン酸クロルヘキシジン	医療用には歯科用がなく、塩酸クロルヘキシジンのトローチ・ダントローチを使用	抗菌剤の中でも広範囲の微生物に作用する部類に属し、特にブドウ球菌などのグラム陽性球菌には、低濃度でも迅速な殺作用を示す。一方、大腸菌などのグラム陰性菌にも比較的濃度で作用することが知られているが、グラム陽性菌に比べ感受性に幅がみられる。真菌類の多くにも感受性をしめすが、全般的に細菌類よりも抵抗性がみられる。				0.1~5%未満(舌のしびれ、味覚異常、口内炎、黒舌症、胃部不快感、胃部膨満感、嘔吐、下痢等)	頻度不明(過敏症)		クロルヘキシジンに対して過敏症の既往歴				口腔内で唾液により徐々に溶かしながら用いる(噛み砕いたり、飲み込んだりしない)(トローチとしての注意)		通常、1回1錠(塩酸クロルヘキシジンとして5mg)を1日3~5回、2時間ごとに投与し、口中で徐々に溶解させる。	口内炎、抗菌剤を含む口腔創傷の感染予防
殺菌成分	クレオソート	配合剤しかなかったため、薬局方を用いた	本薬の防腐、殺菌作用はフェノールに劣るが、毒性並びに刺激作用は弱い。粘膜、創傷面などに対し、初め刺激するが、後に知覚麻ひを起こす									大量使用で粘膜の刺激、腐食、更にめまい、昏睡、けいれん				うか及び根管の消毒、歯髄炎の鎮痛・鎮静。適法に従ってうか及び根管の処置後、適量を滅菌小綿球又は綿組織に浸潤させてか内あるいは根管内に挿入し、仮封する。

歯痛・歯槽膿漏薬

製品群No. 75

ワークシートNo.46

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上限があるもの		
チモール	保存剤として使ったため、薬局方を用いた	本薬は他の有機物が共存しなければフェノールやクレゾールより殺菌力が強い。健康な皮膚、粘膜を腐蝕せず、わずかに刺激により剥離を起こす程度である。しかし、創傷粘膜に対してはかなりの刺激性を有する。内服しても著しく胃腸を刺激することがないから内用剤としても用いられる。														局所の殺菌用に液剤、軟膏剤又は粉剤として使用されている。例えば、チモール1%とサリチル酸3%を含むエタノール溶液、酸化亜鉛やステアリン酸亜鉛を含む1~2%の軟膏、チモール2%、ホウ酸35%を含むタルク製剤などが用いられる。その他本薬はうがいぐすり、洗淨料、歯みがき剤などに添加して用いられる。
ヒノキチオール	配合剤のみ															

歯痛・歯槽膿漏薬

製品群No. 75

ワークシートNo.46

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	I 用法用量	J 効能効果	
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上 限があるもの				過量使用・誤使 用のおそれ
評価の視点		併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの										
局所麻酔成分	塩酸ジブカイン ベルカミン 注、表面麻酔類似と考 え使用	感覚・求心神経線維のNa ⁺ チャネルを遮断することにより局所麻酔作用を発現する。効力、持続性、毒性いずれも最大級の局所麻酔薬であるが、より効力を強めるために局所鎮痛以外の目的にはエビネフリンを添加して用いる		痙攣、痙攣等の中毒症状(頻度不明)	ショック(頻度不明)	頻度不明(眼瞼、不安、興奮、霧視、眩暈、悪心・嘔吐等)	頻度不明(過敏症)		本剤に対し過敏症の既往歴							使用に際し、目的濃度の水性注射液または水性液として使用する。ただし、年齢、麻酔領域、部位、組織、症状、体質により適宜増減する。仙骨麻酔0.05～0.1%注射液にエビネフリンを添加したものを用い、塩酸ジブカインとして、通常成人10～30mgを使用する。伝達麻酔(基準最高用量:1回40mg) 0.05～0.1%注射液にエビネフリンを添加したものをを用い、塩酸ジブカインとして、通常成人3～40mgを使用する。浸潤麻酔(基準最高用量:1回40mg) 0.05～0.1%注射液にエビネフリンを添加したものをを用い、塩酸ジブカインとして、通常成人1～40mgを使用する。表面麻酔 ・耳鼻咽喉科領域の粘膜麻酔には、1～2%液にエビネフリンを添加したものをを用い、噴霧または塗布する。 ・眼科領域の麻酔には、0.05～0.1%液にエビネフリンを添加したものをを用い、通常成人には1～5滴を点眼する。 ・尿道粘膜麻酔には、0.1%液にエビネフリンを添加したものをを用い、塩酸ジブカインとして、通常成人男子10～20mg、女子3～7mg ・膀胱粘膜麻酔には、0.025～0.05%液にエビネフリンを添加したものをを用い、塩酸ジブカインとして、通常成人10～20mg ・局所鎮痛には、0.025～0.05%液を用い、適量を使用する。 歯科領域麻酔 0.1%注射液にエビネフリンを添加したものをを用い、伝達麻酔・浸潤麻酔には塩酸ジブカインとして、通常成人1～2mg	仙骨麻酔、伝達麻酔、浸潤麻酔、表面麻酔、歯科領域における伝達麻酔・浸潤麻酔

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			
評価の視点			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの				使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
抗炎症成分	グリチルリチン酸二カリウム	抗炎症作用		ループ利尿剤・チアジド系およびその類似降圧利尿剤(低カリウム血症)、甘草(偽アルドステロン症)	偽アルドステロン症(頻度不明)、横紋筋融解症(グリチルリチン酸または甘草を含有する製剤)				偽アルドステロン症、ミオパシー、低カリウム血症(低カリウム血症、高血圧症等を悪化)	高齢者、妊婦小児等			長期運用により偽アルドステロン症		グリチルリチンとして、通常成人1日1回40mgを皮下注射する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	薬疹
	グリチルレチン酸	抗炎症作用		ループ利尿剤・チアジド系およびその類似降圧利尿剤(低カリウム血症)、甘草(偽アルドステロン症)	偽アルドステロン症(頻度不明)、横紋筋融解症(グリチルレチン酸または甘草を含有する製剤)				偽アルドステロン症、ミオパシー、低カリウム血症(低カリウム血症、高血圧症等を悪化)	高齢者、妊婦小児等			長期運用により偽アルドステロン症		グリチルレチンとして、通常成人1日1回40mgを皮下注射する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	薬疹
組織修復成分	銅クロロフィリンナトリウム	内服の配合剤のみしかなかった														
止血成分	カルバゾクロム	アドナ(AC-17)錠(10mg) / アドナ(AC-17)錠 30mg / アドナ(AC-17)散10%	細血管に作用して、血管透過性亢進を抑制し、血管収縮作用を増強する。血液凝固・線溶系に影響を与えないこと、出血時間を短縮し、止血作用を示す。血管透過性抑制作用、細血管抵抗増強作用、出血時間短縮作用、血小板・血液凝固系に対する作用、呼吸系・循環系に対する作用を有する。				0.1~5%未満(食欲不振、胃部不快感) 0.1%未満(悪心、嘔吐)	頻度不明(過敏症)		本剤の成分に対し過敏症の既往歴、高齢者					カルバゾクロムスルホンナトリウムとして、通常成人1日30~90mgを3回に分けて経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。高齢者では減量。	毛細血管抵抗性の減弱及び透過性の亢進による出血傾向(例えば紫斑病等) 毛細血管抵抗性の減弱による皮膚あるいは粘膜及び内臓からの出血、眼底出血、腎出血、子宮出血 毛細血管抵抗性の減弱による手術中・術後の異常出血
内服歯槽膿漏薬																

歯痛・歯槽膿漏薬

製品群No. 75

ワークシートNo.46

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化			
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意す べき副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 観るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)					
評価の視点	薬理作用	併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの				使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ	用法用量	効能効果		
抗炎症成分	塩化リゾチー ム	レフトーゼ錠	抗炎症作用: 瘻管形成・組 織修復作用: 膿粘液の分 解と排出作 用: 出血抑制作 用				ショック、アナ フィラキシー 様症状・S-J 症候群・Lyell 症候群(頻度 不明)	0.1~5%未 満(下痢、胃 部不快感、悪 心・嘔吐、食 欲不振)、 0.1%未満(口 内炎等)、頻 度不明(肝機 能障害 (AST(GOT)、 ALT(GPT)、 Al-P、γ- GTP、LDHの 上昇等、めま い)	0.1%未満(過 敏症)		本剤の成分過敏 症の既往歴、卵白 アレルギー(アナ フィラキシー・ショッ クを含む過敏症 状)	アトピー性皮膚炎、 気管支喘息、薬剤 アレルギー、食物ア レルギー等のアレ ルギー性要因、両親、 兄弟等がアレ ルギー症状の既往 歴、高齢者			作用機序は 解明されてい ない点も多 く、用量・効 果の関係も 必ずしも明ら かにされてい ないので、漫 然と投与しな い。	慢性副鼻腔炎の腫脹の 融解、痰の切れが悪く、喀 出回数が多い気管支炎、 気管支喘息、気管支拡張 症の喀痰喀出困難、小 手術時の術中術後出血の場 合、通常、成人は1日塩化 リゾチームとして、60~ 270mg(力価)を3回に分け て経口投与する。2.歯槽膿 漏症(炎症型)腫脹の融解 の場合、通常、成人は1日 塩化リゾチームとして、180 ~270mg(力価)を3回に分 けて経口投与する。高齢 者減量	慢性副鼻腔 炎の腫脹の融 解、痰の切れ が悪く、喀出 回数が多い気 管支炎、気管 支喘息、気管 支拡張症の喀 痰喀出困難、 小手術時の術 中術後出血(歯 科、泌尿器科 領域)の場合 2.歯槽膿漏症 (炎症型)腫脹 の融解の場合
組織修 復成分	銅クロロフィ リンナトリウ ム	内服の配合 剤のみしか なかった															
止血成分	カルバソクロ ム	アドナ(AC- 17)錠(10mg) /アドナ (AC-17)錠 30mg/アド ナ(AC-17) 散10%	細血管に作 用して、血管 透過性亢進 を抑制し、血 管抵抗値を 増強する。血 液凝固・線溶 系に影響を与 えることなく 出血時間を短 縮し、止血作 用を示す。血 管透過性 抑制作用、 細血管抵抗 値増強作用、 出血時間短 縮作用、血 小板・血液凝 固系に対する 作用、呼吸 系・循環系に 対する作用を 有する。				0.1~5%未 満(食欲不振、 胃部不快感) 0.1%未満(悪 心、嘔吐)	頻度不明(過 敏症)							カルバソクロムスルホン ナトリウムとして、通常成 人1日30~90mgを3回に分 割経口投与する。 なお、年齢、症状により適 宜増減する。 高齢者では減量。	毛細血管抵抗 性の減弱及び 透過性の亢進 によると考えら れる出血傾向 (例えば紫斑病 等) 毛細血管抵抗 性の減弱によ る粘膜及び内 臓からの出 血、眼底出血・ 腎出血・子宮 出血 毛細血管抵抗 性の減弱によ る手術中・術後 の異常出血	

歯痛・歯槽膿漏薬

製品群No. 75

ワークシートNo.46

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用	相互作用	併用注意	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上 適量使用・誤使用 があるもの	長期使用による健康被害のおそれ	スイッチ化等に伴う使用環境の変化		
ビタミンC成分	アスコルビン酸「ヨンダ」	アスコルビン酸(ビタミンC)が欠乏すると、壊血病や小児ではメルレル・パロー病を生じ、一般に出血傾向の増大、骨・歯牙の発育遅延、抗体産生能や創傷治癒能の低下などを起こす。コラーゲン生成への関与、毛細血管抵抗性の増強や血液凝固時間短縮などによる出血傾向の改善、副腎皮質機能への関与(ストレス反応の防止)、メラニン色素生成の抑制などが報告されている。								高齢者				下記疾患のうち、ビタミンCの欠乏又は代謝障害が関与すると推定される場合(毛細管出血(鼻出血、歯肉出血、血尿など)、薬物中毒、副腎皮質機能障害、骨折時の骨基質形成・骨癒合促進、肝斑・雀卵斑・炎症後の色素沈着、光線過敏性皮膚炎)には効果が無いのに月余にわたって漫然と使用すべきでない。		通常成人1日50~2,000mgを1~数回に分けて経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。高齢者で減量。	1.ビタミンC欠乏症の予防および治療(壊血病、メルレル・パロー病)、ビタミンCの需要が増大し、食事からの摂取が不十分な際の補給(消耗性疾患、妊産婦、授乳婦、はげしい肉体労働時など。) 2.下記疾患のうち、ビタミンCの欠乏又は代謝障害が関与すると推定される場合。毛細管出血(鼻出血、歯肉出血、血尿など)、薬物中毒、副腎皮質機能障害、骨折時の骨基質形成・骨癒合促進、肝斑・雀卵斑・炎症後の色素沈着、光線過敏性皮膚炎。なお、2の効能・効果に対して、効果が無いのに月余にわたって漫然と使用すべきでない。

歯痛・歯槽膿漏薬

製品群No. 75

ワークシートNo.46

リスクの程度の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ等に伴う使用環境の変化				
評価の視点	薬理作用	併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの				使用量に上	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
フィットナジオン	カチーフン錠(5mg錠)／カチーフン錠(10mg錠)／カチーフン散10mg/g	ビタミンKは血液凝固機能に正常に維持する。	クマリン系抗凝血薬(ワルファリン)(ワルファリンの作用減弱)			類薬(メナジオン)により、高ビリルビン血症(大量・長期投与)頻度不明(悪心、嘔吐、軟便)		妊娠末期(大量投与)					大量・長期投与で高ビリルビン血症(類薬-メナジオン)・妊娠末期の婦人には大量投与を避けること。(類薬-メナジオンで、新生児等に高ビリルビン血症)		フィトナジオンとして、通常成人1日5～15mg、新生児出血の予防には母体に対し10mg、薬剤投与中における低プロトロンビン血症、胆道及び胃腸障害に伴うビタミンKの吸収障害、肝障害に伴う低プロトロンビン血症には20～50mgを分割経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	ビタミンK欠乏症の予防及び治療 各種薬剤(クマリン系抗凝血薬、サリチル酸、抗生物質等)投与中における低プロトロンビン血症 胆道及び胃腸障害に伴うビタミンKの吸収障害 新生児の低プロトロンビン血症 肝障害に伴う低プロトロンビン血症 ビタミンK欠乏が推定される出血
ビタミン成分	酢酸トコフェロール ビタミンE剤:ユベラ錠	微小循環系の賦活作用を有し、末梢血行を促す。膜安定化作用を有し、血管壁の透過性や血管抵抗性を改善する。抗酸化作用を有し、過酸化脂質の生成を抑制する。内分泌系の賦活作用を有し、内分泌の失調を是正する。				0.1～5%未満(便秘、胃部不快感)、0.1%未満(下痢)	0.1%未満(過敏症)						末梢循環障害や過酸化脂質の増加防止の効能に対して、効果が無いのに月余にわたって過剰と使用すべきではない。		錠剤 通常、成人には1回1～2錠(酢酸トコフェロールとして、50～100mg)を、1日2～3回経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	1. ビタミンE欠乏症の予防及び治療 2. 末梢循環障害(間歇性跛行症、動脈硬化症、静脈血栓症、血栓性静脈炎、糖尿病性網膜症、凍瘡、四肢冷感症) 3. 過酸化脂質の増加防止

禁煙補助剤

製品群No. 77

ワークシートNo.47

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効果効果			
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ				薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)				症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)
評価の視点	薬理作用	相互作用	併用禁忌(他 剤との併用により重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効果効果
禁煙 補助薬	ニコチン ニコチネル TTS	タバコに含ま れるニコチン を経皮的に吸 収させ、禁煙 時の離脱症 状を軽減		アドレナリン遮断薬(アドレナ リン遮断性の減弱)、アドレ ナリン作動薬(アドレナリン作 動性の増強)、禁煙開始後 (フェナセチン・カフェイン・テ オフィリン・イミプラミン・ペン タゾシン・フロセミド・プロプラ ノロールの作用の増強)			5%以上(一 次刺激性の 接触皮膚炎 (パッチのた め)、不眠)、 0.1~5%未 満(皮膚剥 離・色素沈着 (パッチのた め)、頭痛、 めまい、倦怠 感、異夢、悪 夢、集中困 難、嘔気、嘔 吐、腹痛、口 内炎、下痢、 食欲不振、 ALT、LDH、 γ GTP、総ビリ ルビンの上 昇)、0.1%未 満(疲労、し びれ、眠気、 易刺激性、胸 焼け、AST上 昇)			非喫煙者、妊婦・ 授乳婦、不安定狭 心症・急性期の心 筋梗塞・重篤な不 整脈・経皮的冠動 脈形成術直後・冠 動脈バイパス術直 後、脳血管障害、 本剤成分過敏症 既往歴	心筋梗塞・狭心症 既往歴、狭心症で 症状が安定してい る、高血圧、不整 脈、脳血管障害、 心不全、末梢血管 障害、甲状腺機能 亢進症、褐色細胞 腫、糖尿病、消化 性潰瘍、肝・腎機能 障害、アトピー性皮 膚炎(パッチとして の注意)、てんかん又 は既往歴、神経筋 接合部疾患又はそ の既往歴、高齢 者、	禁煙の意志 が強く、循環 器疾患、呼吸 器疾患、消化 器疾患、代謝 性疾患等の 基礎疾患を 持つ患者で あって、禁煙 の困難な喫 煙者にしてし ようすること。	過量投与で急性 ニコチン中毒症 状。禁煙指導を 実施。本剤使用 中は喫煙により 循環器系等への 影響が増強され るので、喫煙させ ない。	類薬の長期 使用によりニコ チン依存性 が製剤に引 き継がれ離 脱が困難に なる症例が 報告。10週間 を超えて投与 しない。	ニコチネルTTS10(ニコチ ンとして17.5mg含有)、ニコ チネルTTS20(ニコチンとし て35mg含有)又はニコチネ ルTTS30(ニコチンとして 52.5mg含有)を1日1回1 枚、24時間貼付する。通 常、最初の4週間はニコチ ネルTTS30から貼付し、次 の2週間はニコチネル TTS20を貼付し、最後の2 週間はニコチネルTTS10 を貼付する。なお、最初の 4週間に減量の必要が生 じた場合には、ニコチネル TTS20を貼付する。本剤は 10週間を超えて継続投与 しないこと。	循環器疾患、 呼吸器疾患、 消化器疾患、 代謝性疾患等 の基礎疾患を 持ち、医師によ り禁煙が必要 と診断された 禁煙意志の強い 喫煙者が、 医師の指導の 下に行う禁煙 の補助	